

[成果情報名] ガーベラ栽培2年目の秋の減収について収量構成要素から解明した

[要 約] ガーベラでは栽培2年目の秋に減収する。その原因を解析した結果、芽あたり葉数の増加による頂花の開花間隔の遅延、枯死花芽数の増加による花芽生存率の減少等によるものであることが判明した。

[キーワード] ガーベラ、収量構成要素、季節変動

[担 当] 静岡農林技研・花き生産技術科

[連絡先] 電話0538-36-1555、電子メールagrikaki@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 関東東海北陸農業・花き

[分 類] 技術・参考

---

### [背景・ねらい]

本県におけるガーベラ栽培では、5月に定植した後、改植まで2年間栽培する。生産現場では、栽培2年目の株で秋(高単価期)に減収してしまうことが課題となっているが、その原因は明らかとなっていないため調査する。

### [成果の内容・特徴]

- 1 各農産物の収量を構成する要素のことを収量構成要素と言い、ガーベラにおける収量構成要素は図1の通りである(図1)。
- 2 栽培2年目の秋(9~10月)は減収前の需要期(5月)と比べ、収量が‘キムシー’では2~3割、‘サンディ’では6~7割に減少する(図2)。
- 3 栽培2年目の秋は減収前の需要期と比べ、芽あたり葉数が‘キムシー’では2.2~2.3倍、‘サンディ’では1.7~2倍に増加する(図3)。
- 4 頂花の開花間隔(1芽あたりの生育にかかる期間の指標)が‘キムシー’では1.3~1.6倍、‘サンディ’では1.2倍に遅延する(図4)。
- 5 栽培2年目の秋は減収前の需要期と比べ、枯死花芽数の増加により、花芽生存率が‘キムシー’では4割、‘サンディ’では9割に減少する(図5)。
- 6 株あたり芽数については、栽培2年目の秋と減収前の需要期とで差は見られない(データ略)。

### [成果の活用面・留意点]

- 1 本結果は、ガーベラ‘キムシー’、‘サンディ’での試験結果である。
- 2 ガーベラは相対的短日植物であることなどから、秋の減収には夏期の高温、長日が影響を及ぼしている可能性がある。
- 3 芽あたり葉数が2倍程度まで増加しても、頂花の開花間隔が1.2~1.6倍までしか遅延しない要因として、展葉日数(生育速度)や、花芽の発生から開花に必要な日数に季節間差があることなどが要因であると考えられる。
- 4 冬季の加温を終日18℃設定で行った中での結果である。

[具体的データ]

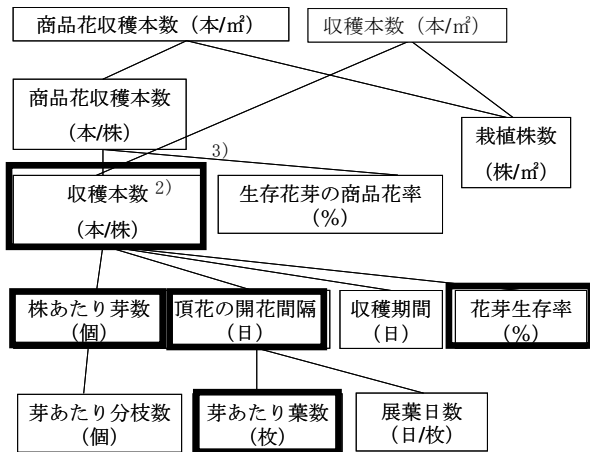


図1 ガーベラの収量構成要素<sup>1)</sup>

- 1) 下位の要素は上位の要素に収束する
- 2) 収穫本数: 商品花と商品花の基準を満たさない切り花を含む、全切り花の収穫本数
- 3) 太枠は本試験で言及した項目を表す

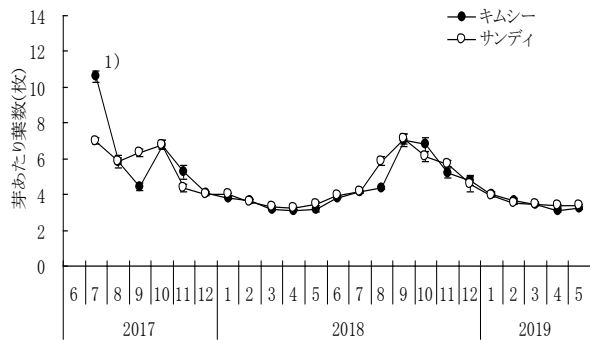


図3 芽あたり葉数の季節間、品種間差異

- 1) エラーバーは標準誤差を表す(n=13)

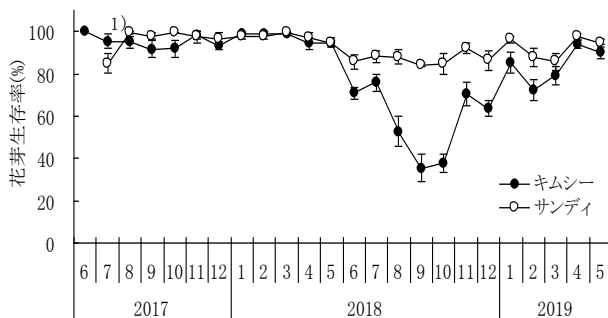


図5 花芽生存率の季節間、品種間差異

- 1) エラーバーは標準誤差を表す(n=13)

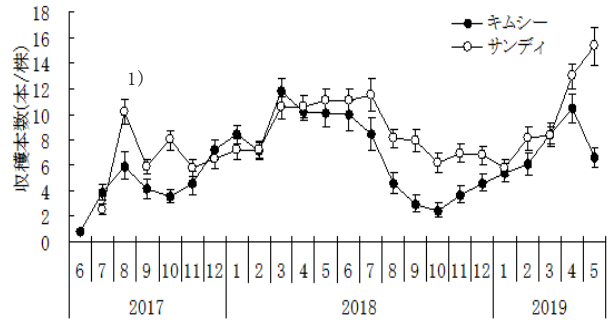


図2 収穫本数の季節間、品種間差異

- 1) エラーバーは標準誤差を表す(n=13)

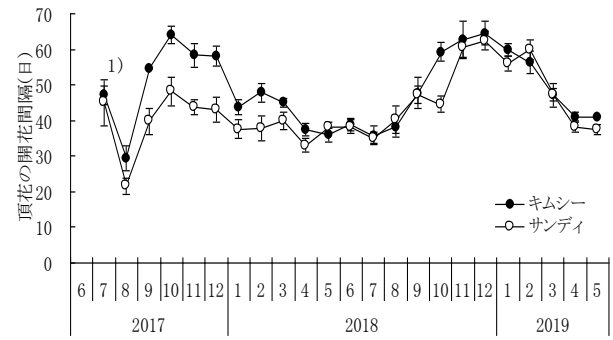


図4 頂花の開花間隔の季節間、品種間差異

- 1) エラーバーは標準誤差を表す(n=13)

[その他]

研究課題名: 夏冬を制する技術開発が花き経営の所得を増加させる

予算区分: 県単

研究期間: 2016~2018年度

研究担当者: 梅田さつき、寺田吉徳、岩崎勇次郎、西岡奈々江、幸前宏美